

しておくことにしたい。右の理解が正しければ、安芸国分寺では天平勝宝二年の段階ですでに重要な法会を開催し、それを支える体制ができていたということになる。そのためには金堂や塔など主要な伽藍がすでに完成していたと考えた方が自然である。今回発見された木簡や墨書土器は、単に安芸国分寺の造営過程だけでなく、国分寺一般の造営過程の見方にも大きな影響を与え、さらに従来ほとんどわからなかった国分寺における宗教活動やそれを支える地域の姿も示してくれる重要な資料といえよう。

木簡の検討作業には、広島大学の西別府元日、国立歴史民俗博物館の平川南、奈良女子大学の館野和己、奈良大学の寺崎保広の各氏ならびに奈良文化財研究所史料調査室の方々のご協力をいただいた。

9 関係文献

〔財〕東広島市教育文化振興事業団「『天平勝宝二年』銘の木簡が出土」『阿岐のまほろば』（文化財センター報二二、二〇〇一年）

同『史跡安芸国分寺跡―出土木簡とその概要―』（阿岐のまほろば特集号、二〇〇一年）

同『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書Ⅳ―第一次・第二三次調査の記録―』（文化財センター報告書第三六冊、二〇〇二年）

（1）7・9 妹尾周三、8 佐竹 昭（広島大学）

徳島県埋蔵文化財センター編

『観音寺遺跡Ⅰ（観音寺遺跡木簡篇）』の刊行

七世紀代の地方支配などを示す木簡群として著名な徳島県観音寺遺跡出土木簡の報告書が、徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第四〇集『観音寺遺跡Ⅰ（木簡篇）』―一般国道一九二号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査―として刊行された。

木簡一点ごとにモノクロ写真・赤外線写真・実測図・釈文と解説を付す。一部木簡はカラー図版も所収する。実測図には削り痕跡などを詳細に記載し、モノとしての木簡がもつ情報を提供している。

また、木簡の理解に不可欠な遺構や共存遺物についての解説も、コンパクトにまとめられている。木簡出土状況の写真もカラー・モノクロとも豊富である。

A 四版・二二二頁・カラー図版八頁・モノクロ図版一四頁・付図一枚。